



「寄稿」 「遊びってなんだろう？」

～大切なことは本質の中にある～

厚真けん玉クラブ代表 齊藤 烈

「遊びってなんですか？」

そう聞かれたときに、皆さんならなんて答えるでしょうか？よくあるのは、「仕事や勉強以外のこと」「休みの日にやること」という回答が多いような気がします。果たして、本当にそれって遊びなののでしょうか？こんなことを考えだすと、「自主性と主体性って何が違うの？」「スポーツってなに？」「自然と環境の違いは？」などなど…普段何気なく使っている言葉も、深く考えていないことや、人それぞれで解釈が異なることってすごく多いような気がしてきます。このように言葉の解釈が違くと、お互いに話が噛み合わないことがあって当然なので、言葉の定義はちゃんと考えなければなりません。だからこそ、日常の中に溢れている「遊び」という言葉の本質についてもうちよっとちゃんと考えることが必要なんじゃないかなと思うのです。

遊びについて考えるときに大切なのは、周りからどのように見えているかではなく、その遊びをやっている本人の気持ちを想像できるかどうかが一番重要だと思っています。例えば、わたしは2歳と0歳の娘がいます。その娘たちは目を離すとティッシュペーパーの箱から、無限にティッシュを出したり、時間をかけて丁寧に畳んだ洗濯物を思い切りぐちゃぐちゃにしたりします。今これを読んでる方で、子育てしたことがある方ならみんな首を縦に振っているはず。そんなとき、わたしはついつい「ちょっと！そんないたずらやめてよー！」「いい加減にしなさい！」なんて言ってしまうのですが、果たしてやっている本人はいたずらをすると思っていたり、わたしを悲しませようと思ったりして、やっているのでしょうか？

娘からすると「楽しそうだったから・・・」「手伝ってあげようと思ったのに・・・」というすごくピュアな気持ちでやった行動が、親からするとただの迷惑行為になってしまう。やっている本人にとってはただの楽しい「遊び」でも、周りから見た人によっては「いたずら」というネガティブな表現で捉えてしまうことがたくさんあるということです。なんだかそれって、お互い損だなーと、日々の子育ての中で思うわけです。そんな日々のモヤモヤを抱えている人は、きっとわたしだけではなく、たくさんいるのだろうなーと思うと、無性に切ない気持ちになります。私も含めて、もっと心に余裕をもって子どもたちの遊びを見守ることができたらいいなと思います。

さて、わたしが代表を務めている厚真けん玉クラブ（以下：あつけん）は人口約4,400人の厚真町を拠点として週に1度のペースで活動しています。クラブは幼稚園児から高齢者まで幅広い年代で構成されており、約40人が在籍しているので「人口の1%」がけん玉をやっていることになります。これって実はすごいことで、札幌市で考えると約2万人がけん玉をやっていることになります。あつけんのルールは「泣かない」「人に優しくする」「おな

らをしない」というかなりユニークなルールです。このルールさえ守っていれば、基本的に何をやっても構いません。走り回ったり、おにごっこしたり、みんなで世間話したり…そうです、けん玉をやらなくてもいいのです。「それってクラブとしてどうなの？」と思う人もいるかもしれませんが、このクラブの目的は「けん玉の技術向上」ではなく、「いろいろな人がいろいろな人と出会える場」なので、全く問題ありません。つまり、けん玉はその目的を達成するための一つの手段なんです。

このように、なにかをやるときは目的と手段を明確にして、「やる」という選択肢のほかに「やらなくてもいい」という選択肢を用意できるかどうか、すごく大事だと思っています。大人も子どもも、やはり強制されたものはおもしろくないですね？それは遊びも同じで、内側から湧き上がってきたものこそが、「本物の遊び」だと思うわけです。

あつけんに来る目的はみんなバラバラです。けん玉が上手になりたい人もいれば、週に1回みんなの顔を見たいだけの人もいます。やるかやらないか、自分で考え、選択することで初めて、「やらされている感」が生まれず、自分ごととして物事を捉えることができます。遊びをとおして学べることは無限大。わたしは、このような感覚が日常の「遊び」にも大切なのではないかと思います。

「集中と夢中」という話があります。日本を代表する歌人である俵万智さんと息子さんのやりとりの中で、俵さんに「遊んでいるときは全然疲れないのにね」と言われた息子さんは、「集中は疲れるけど、夢中は疲れないんだよ」と言い返したという話です。まさに、これこそが遊びの本質なのだと思います。集中ではなく、夢中になれるもの。それはきっと、誰かに言われたことではなく、自ら考え、選び、そして出会ったものなのだと思います。わたしの場合は、たまたまけん玉でしたが、世の中には人の数だけ夢中になれるものがあります。これからも遊び心を忘れず、毎日笑顔で生きていこうと思います。



略歴

1988年、道東の浜中町生まれ。北海道教育大学釧路校（地域学校教育専攻：授業開発コース）卒業。2011年 タイのバンコク日本人学校へ赴任。3年の任期終了後、ワーキングホリデーでオーストラリア滞在。帰国後自然体験等を提供するNPOの職員を経て、2017年厚真町役場に放課後児童クラブのコーディネーターとして入庁。現在、厚真町役場厚真町教育委員会生涯学習課社会教育グループ主任／社会教育主事として主に地域のコーディネーター機能を担っている。

厚真けん玉クラブ代表として、「泣かない、人に優しくする、おならをしない」という方針で、幼児期から高齢者までを対象に年間50回程度、厚真町に関する講演及びけん玉の指導やワークショップを実施している。



子どもを「教える」「育てる」オトナになるために あいうち・としかず

いよいよ私の連載も最終回を迎えました。第1回に約束したように、「子どもの権利条約」をどのように活用していくことができるか、いくつか提案をしてみたいと思います。「子どもの権利条約」の内容は日本国内のルールです。このルールを守らねばならないのは、法律や政策を決めることができる政府や国会、それに選挙権を持つオトナたちです。オトナの中には、もちろん親も、先生も含まれます。特に、親や養育の責任を持つ者に対しては「子どもがこの条約で認められている権利を行使するときには、子どもの発達しつつある能力に合った方法で、適切な指示や指導を与える」責任、権利、および義務を求めています（第5条）。

「なあんだ、結局はオトナには子どもに対して「指示」「指導」をする権利があるんじゃないか」と思われた方、それはそうですがちょっと違います。まず、「子どもがこの条約で認められている権利を行使」できることが大前提なのです。しかも、オトナ（もちろん政府も）は、指示や指導をする際に子どもの意見や意思表示の権利を尊重し、子どもにとって最善のこと（best interests）を実現しようとしなければなりませんとされています。子どもにはオトナに守られる権利があり、自分で自分の権利を知り、それを主張し、行使できるように育つ権利があります。ですから、教育を受けることも、健康に育つことも、文化活動や芸術活動を行うことも、そのための時間や、機会や、施設を使うことも権利なのです。「子どもの権利条約」は、ぜひ皆さんご自身で読んでいただきたいし、できればオトナと子ども、子ども同士、オトナ同士と一緒に読んで、考えを深めたり広げたりしてほしいと思います。「権利」が実際に役に立つのは、その権利のことを知っている事、そして、その権利を主張し行使しようとする時です。自分の権利について無知な子どもは、オトナにとって「管理」し易い対象です。子どもたちは、学校の校則をはじめ多くの規則に縛られています。違いました。オトナが子どもたちを縛っています。それは本当に子どもたちにとって最善のこと（best interests）だったのでしょうか。そして、それらについて、オトナと子どもの間で一緒に考えたり意見を言ったりする機会が保障されてきたでしょうか。

ムーミンの物語に出てくるニンニのような、自分の姿が消えてしまうほど「自分自身の尊厳」も「個性」も「主体性」も失ってしまった子どもが私たちの周りにいないでしょうか。あなたが子どもなら、「だれも一人ぼっちじゃないよ。一緒にたたかおう！」とその子に声をかけて仲間に入れてください。あなたがオトナなら、「失敗してもだいじょうぶ。そして、みんな、ありのままできていいんだ」と穏やかに、でもしっかりした声で言って、そっとその子を見守ってあげてください。もちろん、「子ども権利条約」を読んでおいてくださいね。

AIUCHI TOSHIKAZU

相内 俊一 先生



PROFILE

北海道教育大学、小樽商科大学、同大学大学院ビジネススクールで、政治学、公共政策・経営学などを教え、退職後はNPOの代表として、高齢者の介護予防、認知症予防、高齢者と子どもの助っ人センターなどの活動に取り組んでいる。こぐま座・やまびこ座運営委員（2018～）。

MA・SO・BO

本 シエルジュ

KONNO MICHIMIRO

今野 道裕 先生
國學院大學北海道短期大学部
幼児・児童教育学科
幼児保育コース 教授



PROFILE

1955年生まれ
高校時代より大形劇活動始める
小学校教員28年を経て
2006年～市立名寄短期大学教授
2021年～國學院大學北海道短期
大学部教授
北海道人形劇協会理事
芸術と遊び創造協会会員
日本福祉文化学会会員
北海道教育学会会員
北海道芸術教育の会
ひとり人形劇団「オホーツク風雲
ワクワク団n」として活動中
著作：『作ってあそべる製作ずかん
～3・4・5歳児の保育に～』
(学研・2013年12月)

本の紹介⑤『NHKできるかな』

(枝常弘と7人のグループチャルド本社)

昔 NHK 教育テレビの幼児番組で「できるかな」という番組がありました。ワクワクさんよりも昔の話。のっぽさんとゴン太くんがいろんなものを作って遊びます。その作るものや遊びがダイナミックで楽しそうで、とっても魅力的なんです。例えば「ひこうき」を作るとなれば、もちろん人が乗ったつもりになって遊べるものを作ります。そしてスタジオ中を空にして飛び回ります。「海ごっこ」だったら、大きなクラフト紙で波を作って泳いじゃう。子どもたちとそんな遊びしたら楽しいだろうなあといつも思いました。

そんな楽しい番組が「本」になったので、遊びや工作、仕掛けのアイデアが満載。私もいくつもまねして子どもたちと作ったり、授業に使ったりと大いに利用させてもらいました。のっぽさんって、番組の中では一言も声を出しません。本当はおしゃべりだ。知ってました？



657 美術館からのお知らせ

～657cmのちいさな美術館～

ひだのかな代・絵本原画展



「うまれるまえのおはなし」などの絵本で知られる札幌在住の絵本作家・イラストレーターの「ひだのかな代」さんの絵本原画展を開催。「うまれるまえのおはなし」「オビとタネ」の原画20点を展示します。原画だからこそ感じられる温もりがあります。ぜひ、足をお運びください。

■期 間：6月2日(水)～7月18日(日)
■時 間：9:00～17:00 ■入場料：無料
■会 場：札幌市中島児童会館・こぐま座内

大人向け 子ども文化セミナー
「まるごと！ひだのかな代～絵本と動物」
絵本原画展にあわせて、子ども文化セミナーを開催します。絵本や動物など、絵本制作秘話についてお話ししていただきます。※絵本の販売とサイン会もあります。

■日 時：6月27日(日) 13:00～15:00
■対象・定員：18歳以上 40名
■参加費：1,000円
■会 場：札幌市中島児童会館

5/7(金)
より電話
受付開始

編集後記 「集中と夢中」「のっぽさんとゴン太くん」という言葉にこどもの頃の記憶が蘇りました。「のっぽさんとゴン太くん」の駆け引きと工作を夢中になって視聴し、工作を再現していたあの頃。あれから月日が過ぎ、大人になった今、疲れを忘れるぐらい夢中になれるものが自分にはあるのだろうか？それとも、これからめぐり合うのだろうか？こぐま座に来る子どもたちには「夢中」になれる何かを提供したいと感じました。皆さんも、夢中になれる何かを探してみませんか。(川村)

【お問い合わせ・申し込み】

札幌市中島児童会館 Tel 011-511-3397
札幌市子ども人形劇場こぐま座 Tel 011-512-6886
住所：札幌市中央区中島公園1-1
(地下鉄南北線中島公園駅下車3番出口より徒歩1分)